

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 13 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22653115

研究課題名（和文） 環境モラル教育の教材開発に関する総合的研究

研究課題名（英文） A study about teaching materials development of environmental moral education

研究代表者

吉田 武男 (YOSHIDA TAKEO)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：40247945

研究成果の概要（和文）：

本研究は、環境にかかわるモラルの指導を「環境モラル教育」と命名し、日本における「環境モラル教育」の可能性を探究した。その結果、日本においては「環境モラル教育」を展開するためには、「総合的な学習の時間」がもっとも適していることが確認できた。それを踏まえて、世界で先進的な環境教育を行っているドイツに注目し、そこでの総合的な学習である「事実教授」の教材について「環境モラル教育」の視点から詳細に分析検討した。

研究成果の概要（英文）：

The main purpose of this study is to examine the potentialities of "environmental moral education"; the original term that covers various educational activities and instructions cultivating morals regarding environment. As a result, the study has found that the "Period for Integrated Study" is most suitable for the "environmental moral education" in schools in Japan. Based on this important findings, close investigation in the light of "environmental moral education" has been made on the teaching materials used in schools in Germany, the top leading country in environmental education. The primary focus was on the materials for *Sachunterricht*, the German counterpart of the "Period for Integrated Study".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	0	800,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	360,000	2,360,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：環境モラル教育、環境教育、道徳教育、教材開発

## 1. 研究開始当初の背景

持続可能な社会を構築するには、環境教育の在り方は、今日的な重要課題となっている。その重要性については、新しい教育基本法にも「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保

全に寄与する態度を養うこと」という文言を盛り込んでいるという事実がそれを裏づけている。

ところが、これまでの環境教育は、理科や社会科などの複合的な領域ととらえられて

きたために、概して知識レベルにとどまり、環境にかかわるモラル的な意識や行為を一人ひとりの子どもに身につけさせるところまで十分に検討されてこなかった。つまり、最近の環境教育研究、および社会科教育研究や理科教育研究などの近接分野でも、活発な研究が行われるようになったが、個人モラルに関する問題意識はきわめて少ない状況にある。

また、道德教育の要と言われる「道德の時間」では、基本的に道德的な読み物教材が中心的に活用されながら、「モラルジレンマ方式」や「価値の明確化」や「エンカウンターグループ」などのアメリカの心理学理論を活用した方法も導入されている。もちろん、そうした指導法も一定の効果を有しているが、そこでは得てして現実社会から切り離れたフィクション的な指導が大部分を占めがちである。そのために、環境問題が大きな社会問題になっている今日にあって、現実の環境問題を取りあげたような道德の教材はきわめて少ない、という嘆かわしい問題状況が生じてしまっている。

しかし、道德教育の分野でも、第73回(春期)日本道德教育学会(2009年6月27日～28日)のシンポジウムのテーマが「道德教育の基盤としての自然と環境」であったことに顕著に示されているように、まったく「環境モラル教育」にかかわる研究がなされていないわけではない。ようやく環境モラルも注目されはじめたというのが実況である。

そこで、環境にかかわるモラルの指導を「環境モラル教育」と命名し、それに関する研究に取り組みたいと考えた。具体的には、環境問題を主題にした、総合単元的な道德教育の一環としての「道德の時間」の教材を開発するとともに、その視座から、他教科や他の活動の教材(学習材)の改善に向けて示唆を与えようとするものであった。

なお、この着想のヒントは、応募者の研究によって解明されたシュタイナー教育の道德教育の特質(拙著『シュタイナーの人間形成論—道德教育の転換を求めて—』学文社、2008年)、すなわち、道德指導を授業過程の中で隠されたカリキュラムとして実践するところから得たものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、環境にかかわるモラルの指導を「環境モラル教育」と新しく命名し、それに関する教材とその指導法を開発しようとするものである。具体的には、環境問題を主題にした、総合単元的な道德教育の一環としての「道德の時間」における教材とその指導法を開発するとともに、その視座から、社会科や理科や生活科などの他教科の教材開発、ならびに「総合的な学習の時間」や特別活動の

改善に向けて示唆を得ようとするものである。その研究の特徴は、守るべき外的な対象を確定し、それを守るための教育を目指す従来の受動的な「環境倫理教育」ではなく、個人の内面的な生き方から生み出されるモラルに着目し、持続可能な社会に実際に参画しながら、その社会を築き改善していける積極的な環境モラル能力の育成を目指すところにある。

そのようなモラル能力の育成は、環境教育を、環境に関する道德的知識をただ単に子どもに理解させる、あるいは単なる環境保全を目指す「環境倫理教育」のレベルに留めるのではなく、知った限りは、日常生活の中で正義感・責任感をもって行動しようとする意欲を子どもに喚起させようとしている点で、道德教育研究にとっても、また環境教育研究にとっても新たな地平を拓くことになると考えられる。より具体的に言えば、「環境に悪いことはしてはいけないからしない」や「環境に良いことはしなければならぬからする」という消極的な道德観ではなく、「環境に悪いことはしたくないからしない」や「環境に良いことをしたいからする」という積極的な道德観の育成が期待されるのである。このような現実社会に貢献できる積極的な道德教育こそが、これまでの道德教育研究において見過されてきたものであり、また社会とのかかわりの中で居場所を見つけられずに自閉的になりがちな昨今の子どもにとって、最も必要とされているものではないかと考えられる。

したがって、これからの道德教育は、社会の発展に寄与できるものである点で、後ろ向きの暗いイメージから、前向きで明るいポジティブな指導という特徴を持つことになる。その意味で、この研究の目的は、従来の道德教育の基盤にある基本的な道德観を一掃し、未来を拓く斬新な道德観であるとともに、「環境モラル教育」の教材開発によって一つの新しい道德教育の内容と方法を斬新に提案しようとするものである。

## 3. 研究の方法

上述した研究の目的を達成するために、以下の方法によって行われた。

まず、「道德の時間」をはじめ、社会科、理科、生活科の授業において、環境にかかわった道德(モラル)がどのように指導されているのか、という実態を小学校学習指導要領や教科書(副読本などを含む)を中心に分析した。次に、環境問題や環境教育の分野では世界の先進的な立場にいるドイツのものに焦点を当てて、そこでの環境にかかわった道德(モラル)の指導について分析し、我が国に取り入れるべき知見を明確化した。最後に、そのような分析を踏まえて、総合単元的な道

徳教育としての「道徳の時間」にふさわしい「環境モラル教育」の教材開発と、社会科、理科、生活科、「総合的な学習の時間」の教材改善に向けて重要な示唆を導き出した。

なお、その際に、社会科と生活科にかかわるところでは、社会科教育、特に公民教育を専門とする唐木清志（筑波大学人間系准教授、関連する主要業績：単著『子どもの社会参加と社会科教育—日本型サービス・ラーニングの構想—』東洋館出版社、2008年）、理科にかかわるところでは、理科教育、特に環境教育を専門とする大高泉（筑波大学人間系教授、関連する主要業績：単著「ESDとしての環境教育と理科におけるその意義」、日本理科教育学会、『理科の教育』、57巻7号、2008年、pp.8-11）と連携し、助言を受けながら研究を進めた。

また、年次別には、次のように本研究を計画的に進めた。

2010年度においては、我が国の研究と実践の現状について検討し、研究の視点を確立した。研究の方法としては、文献調査と現地調査を並行して行った。さらに、そのような研究結果を踏まえて、先進的なドイツの環境教育の予備調査と文献収集を行うとともに、一部の研究成果を学術雑誌によって論文として公表した。

2011年度においては、ドイツの現地調査と資料分析を行い、環境モラル教育に関する日本とドイツの比較検討を行った。その結果については、学術雑誌によって公表した。

2012年度においては、これまでの文献調査と現地調査の結果を踏まえ、環境モラル教育に関する日本とドイツの比較検討を行いながら、「環境モラル教育」の可能性についてドイツの事実教授を手がかりに模索した。

なお、本研究における主要参考文献（著書）は、以下のとおりであった。

- ・文部科学省『小学校学習指導要領』東京書籍、2008年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説道徳編』東洋館出版、2008年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』日本文教出版、2008年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版、2008年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説理科編』大日本図書、2008年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』東洋館出版、2008年
- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2008年
- ・『かがやけ みらい 道徳 5年』学校図書
- ・『かがやけ みらい 道徳 6年』学校図書
- ・『道徳5 希望を持って』東京書籍
- ・『道徳5年 きみが いちばん ひかるとき』光村図書

- ・石亀泰郎『さあ森のようちえんへ—小鳥も虫も枯れ枝もみんな友だち—』ばる出版、1999年
- ・今泉みね子、アンネッテ・マイザー『森の幼稚園—シュテンバルトがくれたすてきなお話』合同出版、2003年
- ・今村光章『環境教育という<壁>—社会変革と再生産のダブルマインドを超えて—』昭和堂、2009年
- ・今村光章編著『森のようちえん—自然のなかで子育てを—』解放出版社、2011年
- ・岡部翠編『幼児のための環境教育—スウェーデンからの贈りもの「森のムッレ教室」—』新評論、2007年
- ・カールハインツ フォイヤヘアト、中野加都子『環境にやさしいのはだれ?—日本とドイツの比較—』技報堂出版、2005年
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『環境教育指導資料（小学校編）』東洋館出版社、2007年
- ・財団法人教科書研究センター編『西ドイツにおける事実教授の教科書分析』ぎょうせい、1987年
- ・ジョン・フィエン著、石川聡子他訳『環境のための教育—批判的カリキュラム理論と環境教育—』東信堂、2001年
- ・田中優『環境教育 善意の落とし穴』大月書店、2009年
- ・ティルマン・ラングナー著、染谷有美子訳『ドイツ環境教育教本—環境を守るための宝箱—』緑風出版、2010年
- ・日本環境教育フォーラム編著『日本型環境教育の提案』小学館、2000年
- ・松下良平『道徳教育はホントに道徳的か?—「生きづらさ」の背景を探る—』日本図書センター、2011年
- ・水越敏行・木原俊行編著『新しい環境教育を創造する—子どもがきづく環境へのかけ橋—』ミネルヴァ書房、1995年
- ・御代川貴久夫・関啓子『環境教育を学ぶ人のために』世界思想社、2009年
- ・吉田武男『シュタイナーの人間形成論—道徳教育の転換を求めて—』学文社、2008年
- ・吉田武男・相澤伸幸・柳沼良太『学校教育と道徳教育の創造』学文社、2010年
- ・横浜国立大学教育人間科学部環境教育研究会編『環境教育—基礎と実践—』共立出版、2007年

#### 4. 研究成果

まず、「環境モラル教育」という言葉は、次のように新たに定義づけされた。すなわち、「環境を通して成り立つ道徳的価値観及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深めるとともに、持続可能な社会の構築にその一員として参画できるような実践行動を生み出す教育」である。

そのうえで、次に、日本の現状について、その「環境モラル教育」の視点から、カリキュラムのいくつかの領域を詳細に分析にした。その結果、「環境モラル教育」は、カリキュラムの各領域、さらには学年の枠に縛られ、個別で単発的な実践に留まってしまっている。たとえば、「環境モラル教育」にとって内容的にもっとも親和性の強い道徳の領域では、すぐれた考え方が提示されていても、実際の授業において、読み物資料を使った1時間毎の完結型が大前提になっているうえに、現実の道徳実践ではなく、内面的な道徳的実践力の育成に限定することが求められるために、意識や行為を伴った統合的な道徳教育は十分に展開できない状態であることが明らかになった。

また、社会科や理科などの教科の授業では、それぞれの特有の制約があって、十分な「環境モラル教育」を展開することは不可能であることも明確化された。ただし、小学校1学年および2学年でのみで行われる生活科の授業では、生活科の内容構成の発想が、実社会や実生活で活用できる能力の育成を目指した OECD の主要能力（キー・コンピテンシー）の枠組みと合致しているだけに、実社会や実生活に結びついた道徳教育が十分に可能であり、工夫次第では、有効な「環境モラル教育」が、かなり限定的ではあるが、比較的实现しやすいと考えられた。

それを踏まえ、日本で「環境モラル教育」を展開するためには、各教科の授業ではなく、「総合的な学習の時間」の授業が、現行のカリキュラムを前提とするならば、もっとも適することも確認された。そのうえで、世界で先進的な環境教育を行っているドイツのものに注目し、そこでの総合的な学習である「事実教授」(Sachunterricht)の教材について「環境モラル教育」の視点から分析検討し、日本における「環境モラル教育」の可能性を模索した。その結果、従前の道徳教育の教材を抜本的に改善させるヒントが、「環境モラル教育」の中に包含されているということが明らかになった。

特に、「環境」というコンセプトは、つねに「いのち」を視野に入れながら多面的・多角的な視野を要求するために、わざとらしくではなく、それとなく子どもに生きる意味を重厚に考えさせられる点で、大いに着目されてよいものである。その意味で、今後の我が国にふさわしい道徳教育を展望する際には、「環境」という事象が「人権」とともに、よりいっそう題材として取りあげるべきである。それによって、道徳性の育成は、副読本に登場する主人公の心情を探ることによって、「内面的自覚」ないしは「自己を見つめる」だけでは不十分であることが、白日の下にさらされるであろう。そのような抜本的な

考え方の転換がない限り、「道徳の時間」をそのまま維持しようが、またその時間を教科化しようが、大きな意味もないどころか、教師や子どもに道徳や道徳教育それ自体に不信感と嫌気を起こさせるだけである。さらに言えば、道徳教育にとってすばらしい教材が取り扱われても、登場する主人公の心情を探っているだけでは、現実社会に即応できる道徳教育は生まれまいであろう。それだけに、明確な学問的・科学的知見を基盤にした「環境モラル教育」には、従前の道徳教育の在り方を根本的に改善させる可能性が垣間見られる。その点を本研究によって発見できたことは、日本の道徳教育研究において新たな地平を拓いたと考えられる。

今後は、従前の古い道徳教育から脱却できない道徳教育研究者に委ねているだけでは、「環境モラル教育」の教材開発は確実に不可能であろう。そのために、道徳教育研究者だけでなく、社会科、理科、生活科、特別活動、「総合的な学習の時間」などの隣接領域の研究者、さらにはカリキュラムや学習指導の研究者も加わるかたちで、「環境モラル教育」の教材開発が求められるところである。

さらに言えば、その前提条件として、学習指導要領に記されている第3章「道徳」の内容項目についても、アブリオリなものとして固守あるいは部分修正や加筆に留めるのではなく、抜本的な改善が必要不可欠であることも垣間見られた。この点についての言及は、従来の我が国の道徳教育研究ではターブ視されがちであり、そのためにほとんど省みられなかっただけに、この研究成果のインパクトはきわめて大きいと言えるであろう。次回の学習指導要領の改訂に際しては、道徳教育の内容に関して、抜本的な改革を断行することが期待される。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

- ①吉田武男「環境モラル教育の可能性—ドイツの環境教育の事例に着目して—」(『筑波大学道徳教育研究』、第14号、2013年、41-56頁、査読無し)
- ②吉田武男「環境モラル教育の可能性—小学校学習指導要領に着目して—」(『筑波大学道徳教育研究』、第13号、2012年、71-82頁、査読無し)
- ③吉田武男・片平克弘「生活科と道徳教育の関連性—小学校学習指導要領に着目して—」(『筑波大学道徳教育研究』、第12号、2011年、41-54頁、査読無し)

〔学会発表〕(計 1 件)

①吉田武男「環境モラル教育の可能性」日本  
教材学会第 23 回研究発表大会、2011 年 10 月  
22 日、東京学芸大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 武男 (YOSHIDA TAKEO)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：40247945

(2) 連携研究者

大高 泉 (OTAKA IZUMI)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：70176907

唐木 清志 (KARAKI KIYOSHI)

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：40273156